

## 「そのもの」の用法と意味

茂木俊伸

(キーワード:「そのもの」, 比喩, 再帰表現, 強調, とりたて)

### 0. はじめに

現代日本語の表現「そのもの」には、次の(1)の1のような再帰表現に似た用法と、同じく2のような比喩的な用法という、概ね二つの使われ方がある<sup>1</sup>。

#### (1) 【そのもの】

##### 1 N そのもの

- (1) 機械そのものには問題はないが、ソフトに問題があるようだ。
- (2) この本がつまらないじゃない。読書そのものが好きになれないんだ。  
「それ自体」という意味を表す。

##### 2 N そのものだ

- (1) その合唱団は天使の歌声そのものだ。
- (2) あの映画は彼の人生そのものだ。  
何かに例えて、その通りだということを強調するのに使う。 (グループ・ジャマシイ 1998:171)

英語の-self 形のような再帰表現が、ある種の強調的用法を持つことは知られているが (cf. Cohen (1999), König (1991, 2001)), それに対応するこのような現象は、日本語ではこれまでほとんど考察されていない。

本稿の目的は、「そのもの」の分析を行い、次の二つの点について、(1)の辞書的記述から発展させることにある。第一に、それぞれの用法の記述を深め、「それ自体」という意味(用法1)や、「例えて」「強調する」(用法2)ということの内実をより明確にすること、そして、第二に、表面的には性質の異なるこれら二つの用法の接点を探り、両者の関係を明らかにすることである。

以下では、まず「そのもの」が持つ二つの用法を概観し、その相違点を明らかにする(第1節)。次に、それぞれの用法の分析を詳しく行う(第2節～第3節)。さらに、これを受けて、「そのもの」の意味記述を行う(第4節)。

### 1. 「そのもの」の二用法

本節では、まず、「そのもの」の二つの用法を概観し、これらが何に基づいて区別されるものであるのかを明らかにする。

本稿では、先の(1)の用法1や次の(2)のように、名詞(句)に「そのもの」が後接し、「名詞+そのもの」が格成分になる場合を、便宜的に、「そのもの」の「名詞的用法」と呼ぶことにする。

#### (2) 名詞的用法:

- a. 思い出の下宿も、建物そのものがなくなってしまった。
- b. データそのものには問題がなさそうだ。
- c. あの店では、素材そのものの味が堪能できる。

一方、(1)の用法2や次の(3)のように、「そのもの」が文末(節末)においてモノのサマや属性を表す場合を、「そのもの」の「述語的用法」と呼ぶことにする。

(3) 述語的用法：

- a. 球団の誘致は、町の人たちの夢そのものだった。
- b. 一緒に育てられた僕といとこたちは、兄弟そのものだ。
- c. 彼の表情は真剣そのものだ。
- d. 実直そのものの叔父

この名詞的用法と述語的用法の相違点として、次のような現象を指摘することができる。

- (4) a. 前接要素の品詞  
b. 「自体」との置き換え  
c. 前接名詞の種類

まず、述語的用法では、先の(3c-d)のように、形容動詞(ナ形容詞)の語幹に直接「そのもの」が後接する。これに対し、名詞的用法の「そのもの」が後接する要素は名詞に限られる。

- (5) 今年の新入部員には、真剣\*(さ)そのものが不足している。 (名詞的用法)

なお、この「そのもの」の前接要素の品詞(統語範疇)に関する制限は、名詞のみ(名詞的用法)か、名詞と形容動詞(述語的用法)<sup>2</sup>か、という形の違いであり、完全な相補分布にはなっていない。

次に、名詞的用法の「そのもの」は、次の(6)のように再帰表現「(それ) 自体」との交替が可能であるが、述語的用法の「そのもの」はこのような置き換えができない。

- (6) a. 彼の考え方 {そのもの / 自体} に疑問を感じる。 (名詞的用法)  
b. うちの祖母は80歳を過ぎてても健康 {そのもの / \*自体} だ。 (述語的用法)

最後に、名詞的用法の「そのもの」は、ヒト名詞には後接しにくい。これに対して、述語的用法にはこのような制限がなく、ヒト名詞に後接した場合も比喩的な解釈が得られる。

- (7) a. ?太郎そのものは悪い人ではない。 (名詞的用法)  
b. あの姿は、往年の太郎そのものだ。 (述語的用法)

指示表現を入れ替えた「このもの / あのもの」がないことが示すように、「そのもの」は全体で固定化した表現であると言える。しかし、(7a)のような現象からは、名詞的用法の「そのもの」が、「その」の指示機能と「もの」の意味を残していることがうかがわれる。

これらの現象を踏まえると、「そのもの」の二用法の異なりの中心にあるのが、文中か文末かという表面的な分布の違いではないことは明らかである。実際、名詞的用法の「そのもの」も、分裂文((8a))や一部のコピュラ文(倒置指定文)((8b))では、文末位置に現れる。

- (8) a. 国際社会で問われているのは、日本社会のあり方そのものだ。  
b. 今の日本の問題は、社会のあり方そのものだ。

むしろ、二用法の相違を捉える上で重要なのは、指示的か叙述(非指示)的か、という「そのもの」の前接要素の意味的特徴である。すなわち、名詞的用法の「そのもの」は、何らかの指示対象を持つ名詞に後接するのに対し、述語的用法の「そのもの」は、叙述成分としての形容動詞(語幹)や名詞に後接する。

ここから、一つの名詞が指示的用法と叙述的用法の両方を持つ場合、後接する「そのもの」も二つの用法で使えることが予測されるが、次のように、これは実際に正しい。

- (9) a. 健康そのものをテーマにしたシンポジウムが開かれる。 (名詞的用法)  
 b. 彼女の祖母は健康そのものだった。 (述語的用法)
- (10) a. 川で溺れかけたせいで、夏そのものが嫌いになった。 (名詞的用法)  
 b. このところの日差しは、夏そのものだ。 (述語的用法)

ここまでの分析をまとめると、次のようになる。

- (11) 「そのもの」の用法(名詞的用法か述語的用法か)は、前接要素の意味的特徴(指示的か叙述的か)と相関する。

先に見た(4)の三つの現象、すなわち、名詞的用法の「そのもの」が形容動詞に後接せず((4a))、名詞を先行詞とする「自体」と交替でき((4b))、また先行詞となる名詞に制限を持っている((4c))という現象は、この用法の「そのもの」の前接要素が持つ指示性から説明することができる。

## 2. 名詞的用法の分析

以下では、「そのもの」の名詞的用法と述語的用法について、具体的な例を検討し、それぞれの特徴をまとめていく。本節では、まず、名詞的用法の「そのもの」について考える。

### 2.1 基本的特徴

名詞的用法の「そのもの」が現れる文脈の一つとして挙げられるのは、「そのもの」が後接する名詞(X)と対比される別の名詞(Y)が文中に現れる場合である。例えば、(12a)では一つの文の中で「企業」(X)と「子会社」(Y)が、(12b)では「タイ料理」(X)と「トムヤムクン」(Y)が対比されている。

- (12) a. 彼の興味は、この企業そのものではなく、その子会社にある。  
 b. タイ料理そのものは好きだが、トムヤムクンはどうも苦手だ。

一方、次の(13)のように、顕在的な対比要素が文中に存在しない文脈も可能である。ただしこの場合も、「料理の味」(Y(だけ))ではなく「素材」(X)の味が」のように、何らかの要素との対比的な解釈がなされる。

- (13) あの店では、素材そのものの味が堪能できる。

ここで、名詞的用法の文を「X そのものがP」のように表すとすると、解釈の上では、Xと対比される要素Yが、形式として明示されるかどうかにかかわらず、必ず何らかの形で存在していると言える。このときXとYは、意味あるいは文脈上、相互に関連した(同一の集合に含まれる)要素として、話し手が意識しているものである。

ただし、「そのもの」によって対比されるXとYは、まったく同列の要素ではない。例えば、「企業—子会社」((12a))は現実世界の支配(上位—下位)関係、「タイ料理—トムヤムクン」((12b))は概念的な包含関係にある。このとき同時に、解釈上、話し手が意識の中でより重きを置き、配慮をしている要素は、前者(X)であると言える。また、「素材」(13)は、「味」を考える上で、話し手が、例えば「料理」よりも重要な、叙述を行う上で基盤となる要素と捉えているものである。

ここから、二つの要素は、Xがより上位の、基盤となる概念として、対比されるYはより下位の、派生的な概念として解釈される、という関係にあると言える。つまり、名詞的用法「X そのものがP」では、常に下位の要素Yとの対比において、Xについて何らかの事柄が述べられていることになる。

### 2.2 構文

名詞的用法の「そのもの」が用いられる構文としては、まず、先の(12b)のような「(Yは~だが) X そのものはP」もしくは「X そのものはP (だが、Yは~である)」のように、対比の「は」が後接する場合が挙げられる。このとき、Yが明示されるかどうかにかかわらず、対比・譲歩的な解釈が得られる。

(14) 対比・譲歩：

- a. この論文は、(分析はおかしいが,) 発想そのものは間違っていない。
- b. 大学の建物そのものは非常に古い (が, この研究室の設備は新しい)。

また、「(Yのみならず) X そのものが P」のように Y に X が累加される例がある。Y が明示されない場合、「(上位の) X が (そもそも) P である」ことを述べることで、Y が X から類推されることになる。

(15) 累加・類推：

- a. この論文は、(分析は言うに及ばず,) 発想そのものが間違っている。
- b. (行政の対応だけではなく,) 教育制度そのものの見直しが必要だ。

さらに、比較構文「X そのものより Y が P」では、「大本の (原因である) X よりも派生的な Y の方が P である」のような解釈になる。

(16) 比較：

- a. 地震そのものより、火災による被害のほうが大きかった。 [人民は弱し官吏は強し]
- b. 漂流者が、飢えや渴きで倒れるのは、生理的な欠乏そのものよりも、むしろ欠乏にたいする恐怖のせいだという。 [砂の女]

このうち、対比・譲歩 (14) と比較 (16) の例では、「そのもの」を除いても「は」や「より」によって、二項間の関係を表す解釈が得られる。このときの「そのもの」の働きは、二項を対比・比較することそのものではなく、二項間に尺度を導入し、常に「X>Y」という関係の下に対比・比較するという点にある。

例えば、(14a) と (16a) の「そのもの」を Y の後の位置に移動させると、X と Y の関係は逆転し、特殊な文脈を想定しないかぎり解釈が困難な文になる。

- (17) a. ??この論文は、分析そのものはおかしいが、発想は間違っていない。
- b. ??地震より、火災そのものによる被害のほうが大きかった。

このような二項間の上位・下位の関係は、あくまでも話し手による捉え方の問題であり、語彙論的意味や現実世界における一般的な知識と相反する場合もありうる。しかし、(17)のような形でテストをすることにより、その文における二項間の関係を確認することができる。

以上見てきた名詞的用法の「そのもの」の特徴をまとめると、次のようになる。

- (18) 名詞的用法の「そのもの」(「X そのものが P) は、
  - a. 前接する要素 X と別の要素 Y との関係の下に叙述を行う。
  - b. X は Y よりも上位の、基盤となる概念である。

「そのもの」が持つ、前接要素と同類の要素を導入するという性質は、「だけ」や「も」のような日本語のとりたて詞 (cf. 沼田 (2000)) と共通する<sup>3</sup>。また、König (2001) は、“intensifier”と呼ばれる、英語の-self 形をはじめとする多数の言語の再帰表現が、とりたて詞相当の焦点化表現と共通する特徴を持つことを指摘している。さらに詳細に検討する必要があるが、再帰的解釈を持つ日本語の「そのもの」が、とりたて詞と共通する意味特性を帯びるという現象も、同様の位置付けができると思われる(「とりたて」論における「そのもの」の位置付けについては、茂木(2006)を参照)。

### 3. 述語的用法

次に、(19)のような述語的用法の「そのもの」を検討する。

- (19) a. 誰が見ても、今回の異動は報復人事そのものだ。 (名詞+そのもの)  
 b. 音楽は彼の人生そのものだった。 (同上)  
 c. 彼の表情は真剣そのものだ。 (形容動詞+そのもの)  
 d. ビジネスクラスの旅は快適そのものだった。 (同上)

述語的用法の文「XはYそのものだ」は、「XはYの典型である」あるいは「XはまさにYという表現で捉えられる」ということを述べている。Yの位置に現れるのは、モノのサマ・属性・タイプを表す表現であり、「XはYそのものだ」では、このYとの比較によってXのサマや性質が表される。このような二項の比較による叙述は、一般的に比喩で行われるものと同質である<sup>4</sup>。

「そのもの」を含む(19a)の名詞述語文は、「報復人事以外のなにものでもない」のような、「XはY以外には言いがたい」という排他性の強いニュアンスを帯びる。一方、「音楽は彼の人生だ」というメタファーの例に「そのもの」が加わっている(19b)から、「そのもの」の比喩的な意味合いを選別することは難しい。この「そのもの」はむしろ、「まさに彼の人生だ」のように同一性・近接性を強調するニュアンスを担っているように思われる。

これらの「名詞+そのもの」の例では、Y項のモノに伴われる百科事典的な意味特徴によって、X項のモノを叙述していると言える。「そのもの」が通常の叙述ではなく、あくまでもある種の「見なし」を表すということは、次のような例から分かる。

- (20) a. あの人は、私の父親だ。  
 b. あの人は、私の父親そのものだ。

(20a)は、「私」と「あの人」の血縁関係を述べているのに対し、(20b)は、「あの人は(血縁関係はないが)私の父親同然だ」という、むしろ(20a)のような血縁関係はないという解釈が得られる(先に示した(3b)も同様の例である)。

一方、(19c-d)の「形容動詞+そのもの」の場合、Y項のモノの特徴によってXを叙述するのではなく、Y項の形容動詞が表す属性・性質を強調するニュアンスを生じる。このときの解釈は、「非常に」「驚くほど」のような高程度を表す程度表現に近い。

- (19') c. 彼の表情はかなり真剣だ。  
 d. ビジネスクラスの旅は非常に快適だった。

このとき、形容動詞の例のみを見れば、「そのもの」は程度表現として分析できるようにも思われるが、この分析は「名詞+そのもの」の例には適用できない。(19a-b)のように名詞に「そのもの」が後接する場合、程度表現に置き換えることは不可能か、直接的にはなじまないためである。

- (19') a. \*誰が見ても、今回の異動はかなり報復人事だ。  
 b. \*音楽は非常に彼の人生だった。

ここから、「そのもの」は、程度性を持たない名詞とも結びつく何らかの内容を表していると考えるのが妥当だと言える。では、ここまで見てきた、述語的用法の「そのもの」に伴われる多様な解釈、すなわち、排他性((19a))や比喩の強調((19b))、程度性((19c-d))や同然性((20b))に共通する内容とはどのようなものであろうか。

先にも触れたように、「XはYそのものだ」は、「Xは、まさにYという表現で捉えられる」「Xは、一言で言えばYである」ということを表すと言える。ここから、述語的用法の「そのもの」は、この「まさに」「一言で言えば」の部分の担っており、YはXについて叙述する上で、「最も妥当な表現」であることを示していると考えられる。この「最も妥当な表現」とは、「他に言いようのない」表現であり(排他性)、「そのサマで捉えるのが最もふさわしい」表現であり(程度性)、「そのモノで例えるのが最もふさわしい」表現である(比喩の強調、同然性)。

「そのもの」が「最も妥当な表現」を表すということは、次のように、Yの表現に関してメタ的に言及する文脈が伴われることから裏付けられる。例えば(21a)では、「それ」(=主人公の受難)を表すのに最も適切な表現を選ぶ過程が表されており、「差別」「圧迫」といった候補を破棄した上で、「迫害」が選択されている。

- (21) a. それは差別とか圧迫といった生やさしいものではなく、もはや迫害そのものであった。 [花埋み]  
b. 江戸時代の人々が生活の中で作り上げたしくみは、今風に言えば、リサイクルそのものだ。

以上のことから、述語的用法の「そのもの」の特徴は、次のようにまとめられる。

- (22) 述語的用法の「そのもの」(「XはYそのものだ」)は、  
a. 前接する表現Yが持つ特徴に基づいて、要素Xの叙述を行う。  
b. Yは、Xを叙述する上で最も妥当な表現である。

この述語的用法の「そのもの」には、とりたて副詞との共通点を見出すことができる。工藤(1977)は、「まさに」「まさしく」のような副詞を、「他の範列語群をかえりみず指定的に強調」(同:974)する、「選択指定」の限定副詞(工藤(2000)ではとりたて副詞)と位置付けている。述語的用法の「そのもの」はこれらの副詞と共起する場合があるが、その親和性から考えても、これらの副詞と同様の機能を果たしていると考えられる。

#### 4. 「そのもの」の意味

ここまで、「そのもの」の名詞的用法と述語的用法についてそれぞれ詳しく見てきた。ここで問題になるのは、二つの用法の「そのもの」の関係をどのように捉えるか、という点である。

一つには、これらの「そのもの」を独立した語彙項目(同音異義語)とする考え方ができる。しかし、この場合、「そのもの」という語になぜ二つの使われ方があるのか、という疑問に答えることはできない。

したがって、ここでは、「そのもの」は一語であり、共通の意味の基盤と生起環境との相互作用によって二つの用法が生じる、という方向を探ることにする。この場合、二つの用法の共通点が、検討すべき「そのもの」の「意味」である。

ここで再度、「そのもの」の二用法の記述を確認する。

- (18) 名詞的用法の「そのもの」(「XそのものがP」)は、  
a. 前接する要素Xと別の要素Yとの関係の下に叙述を行う。  
b. XはYよりも上位の、基盤となる概念である。 [再掲]  
(22) 述語的用法の「そのもの」(「XはYそのものだ」)は、  
a. 前接する表現Yが持つ特徴に基づいて、要素Xの叙述を行う。  
b. Yは、Xを叙述する上で最も妥当な表現である。 [再掲]

名詞的用法の「そのもの」と述語的用法の「そのもの」に共通するのは、まず、「そのもの」が前接要素に範列的關係を導入する、という点である。すなわち、「そのもの」の前接要素は、必ず同種の要素(を含む集合)と対比されている。特に名詞的用法ではこのことが明らかであり、これらの要素が配置される尺度上の「基盤」となる要素がマークされていた。

一方、述語的用法では、叙述表現Yと範列的關係にあるのは、他の叙述表現である。Yは、それらの表現との比較において「最も妥当」な表現と位置付けられる。最も妥当な表現であるということは、「要素Xを叙述するにあたり、Xを特徴付ける素性を最も多く見出すことができるモノ・属性はYであった」ということを指す。言い換えれば、Xが何のプロトタイプであるのかを述べたのがYである。

したがって、いずれの用法においても、「そのもの」は、範列的關係に生じる尺度の最上位をマークしていると言える。二つの用法において「そのもの」がマークする具体的な対象が異なるのは、先に(11)に示したように、「そのもの」の前接要素の意味的性質が異なるためである。

- (11) 「そのもの」の用法(名詞的用法か述語的用法か)は、前接要素の意味的特徴(指示的か叙述的か)と相関する。 [再掲]

名詞的用法では、「そのもの」の前接要素は、指示性を持つ名詞である。「そのもの」が問題にするのは、一定の尺

度上に並んだ形で捉えられる、指示物間の範列的關係である。このとき、指示物とその同類の要素を文脈に即して序列化し、序列の最上位の X を取り出すのが、この用法の「そのもの」の働きである。

一方、述語的用法では、「そのもの」の前接要素は、叙述成分である。叙述の対象 X をどのようなモノや表現と比較すればよいのかを、百科事典的知識に基づいて検討し、妥当な叙述表現の中で最上位の Y を取り出すのが、この用法の「そのもの」の働きである。

以上の分析から、「そのもの」の意味をまとめると、次のようになる。

(23) 「そのもの」の意味：

「そのもの」は、範列的關係を導入し、前接要素がその中で最も上位のものであることを述べる。

## 5. おわりに

本稿では、「再帰」や「比喩」、「強調」という、一見して接点のない内容 ((1)) を表す「そのもの」の意味が、要素の範列的關係の導入という観点 ((23)) から統一的に記述できるということを示した。

((23)) の「そのもの」の意味から生じる二用法に関する本稿の主張をまとめると、次のようになる。

(24) 「そのもの」の用法：

- a. 前接要素の意味的特徴により、「そのもの」の表す内容は異なる。
- b. 「そのもの」の名詞的用法（「X そのものが P」）では、前接する指示要素 X について、別の要素 Y との関係の下に叙述を行い、X が Y よりも上位の、基盤となる概念であることが述べられる。
- c. 「そのもの」の述語的用法（「X は Y そのものだ」）では、前接する叙述表現 Y が持つ特徴に基づいて X の叙述を行い、Y が X を叙述する上で最も妥当な表現であることが述べられる。

## 付 記

本稿は、日本言語学会第131回大会におけるポスター発表「『そのもの』の用法と意味」（2005年11月20日、於：広島大学）の内容、および茂木（2006）で扱った内容の一部に、加筆・修正を行ったものである。

## 注

- <sup>1</sup> イディオム的な「そのものずばり」は、「そのもの」と異なる振る舞いを見せるため、本稿の分析対象から除く。
- <sup>2</sup> 述語的用法の「そのもの」には、副詞に後接する次のような例も考えられる。ただし、文末で「だ」を伴う用法を持つ副詞に限られる。  
(i) 田舎の暮らしは、{のんびり / (?) ゆったり} そのものだ。
- <sup>3</sup> このほか、鈴木（1972：232-3）は、「そのもの」と「第二種のとりたてのくつつき」（「だけ」「ばかり」など）との間に形態論的な共通性があることを指摘している。
- <sup>4</sup> 山梨（1988：38）は、「…そのものだ」を直喩の標識の一種としている。

## 例文出典

例文右に作品名を示した例は、『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』（新潮社／NEC インターチャネル、1995年）による。

## 参考文献

- 工藤 浩 (1977) 「限定副詞の機能」松村明教授還暦記念会 (編) 『松村明教授還暦記念国語学と国語史』, 明治書院, pp.969-986.
- 工藤 浩 (2000) 「(第3章) 副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 『日本語の文法3 モダリティ』, 岩波書店, pp.161-234.
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
- 国立国語研究所 (中村明) (1977) 『比喩表現の理論と分類』秀英出版.
- 小矢野哲夫 (1997) 「擬似モダリティの副詞について—「まるで」を例として—」佐藤喜代治 (編) 『国語論究6 近代語の研究』, 明治書院, pp.287-318.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 沼田善子 (2000) 「(第3章) とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子 『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, 岩波書店, pp.151-216.
- 茂木俊伸 (2006) 「再帰, 比喩, 強調—その接点と「とりたて」論—」『文法理論の諸言語現象への適切な適用にむけて』(平成17年度~平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(研究代表者: 矢澤真人)), 筑波大学, pp.77-89.
- 初山洋介 (2003) 「認知言語学における語の意味の考え方」『日本語学』22:10, 明治書院, pp.74-82.
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版会.
- Cohen, Dana. (1999) Towards a Unified Account of Intensive Reflexives. *Journal of Pragmatics* 31:8, 1041-1052. Elsevier Science B.V.
- König, Ekkehard. (1991) *The Meaning of Focus Particles: A Comparative Perspective*. Routledge.
- König, Ekkehard. (2001) Intensifiers and Reflexive Pronouns. In M. Haspelmath et al. (eds.) *Language Typology and Language Universals: An International Handbook*. vol.2. 747-760. Mouton de Gruyter.



# On the Meaning and Use of *Sono-mono* in Japanese

Toshinobu MOGI

This paper describes the meaning and use of the expression *sono-mono* in Japanese.

*Sono-mono* has two uses like the so-called emphatic-reflexive *itself* in English. One is “noun use” which has reflexive interpretation, the other is “predicative use” which has a metaphorical one. This paper shows that the factor determining these interpretations of *sono-mono* is the referential property of the preceding phrase.

Finally, this paper concludes that the basic meaning of *sono-mono* can be defined as the marker of the upper bound of the paradigmatic scale.